被害者の声

『性犯罪被害に遭うということ ～被害者の私が自分らしく生きる選択～』

講　演　者：早川（はやかわ）　恵子（けいこ）さん（性犯罪被害者）
元音楽デュオ PANSAKU（パンサク）の PAN（パン）として活動

愛知県豊橋市出身。2004年、音楽練習の帰り道で見知らぬ男に襲われ、車の中で被害に遭う。2010年に友人のSAKU（サク）と結成した音楽デュオ PANSAKU で被害体験を基にした作詞曲「STAND」を発表、全国各地で被害者支援の講演・ライブを行う。2014年 SAKU が育児中心の生活となり活動を終了。2015年山形県「心をつなぐんぼプロジェクト」で被害者支援をテーマにした「君のとなり」を作詞曲。現在は男児２人の子育てをしながら講演を行っている。

自分でなくなっていくような感覚

「みなさん、こんにちは」と明るく登壇された早川さんは、１歳半の二男を夫にあずけ、３歳の長男と一緒に新幹線で上京したことや３歳児パワーにノックアウトされそうな日々など「ごくごく普通の主婦」という日常生活を紹介しながら「そんな自分がどんな被害に遭い、どういう道のりで少しずつ自分を取り戻してきたか、お話します」と、被害体験とその後の日々を語り始めました。

事件当時、早川さんは福祉施設に勤務する24歳。仕事のあと、いつもの音楽練習の帰りにコンビニ駐車場に車を止め、車内で休んでいた時、いきなり助手席に乗り込んできた見知らぬ男に首を絞められ、「殺すぞ」と脅され暗い農道まで運転させられた末、被害に遭いました。想定外の出来事に頭の中は真っ白、恐怖で固まってしまい、大声をあげたり抵抗したりすることは全くできず、「絶望の中で死を覚悟した」そうです。

支えてくれる存在の大切さについて話す早川さん

犯人が歩いて逃走した後、外傷はほとんどなかった早川さんですが「身体がバラバラに引き裂かれてしまったような痛み」に見舞われながら「何でまっすぐ家に帰らなかったのだろう」「何で車のカギをかけなかったのか」などと自分を責め続けていました。その一方で「自分自身の存在が完全に否定され、自分でなくなっていくような感覚」

になったと振り返られました。

警察と病院での酷い二次被害

被害後、早川さんは自分で車を運転し警察に向かいました。その時は「自分の体なのに自分でない、感情のない自分が自分を支配している」状態だったといい、それが「解離」症状とは後で知ります。ところが助けを求めた警察と連れていかれた病院で、とんでもない二次被害に遭います。警察では薄暗い取調室で複数の男性警察官から被害について何度も聴かれ「やっと安全な場所に来たと思っていたのに、そこは怖くて苦しい場所でした」。産婦人科病院では男性医師が何の配慮もなく身体に触ってきた時、感電したような痛みに襲われます。そのうえ処置が終わって待っている早川さんの目の前でその医師が警官に言った言葉に苦しめられます。「それを聞いた時、自分の存在そのものが汚くなってしまった、と思いました」といい、その後何年も苦しめられました。被害現場で立ち会っての実況検分や写真撮影にも「被害時と同じくらいの衝撃」が残ったそうです。

1年後から始まった苦しみの日々

被害の翌日以後、早川さんは「目の前の仕事に集中していれば、消えて無くなってくれる」との願いを込めて一生懸命働き、1年ぐらいは何事もなく過ぎました。ところがある日、電車に乗っていて目の前を男性が通り過ぎた瞬間、「殺される。どうしよう」とパニックになり、降りたホームで泣き叫んでいました。犯人と同じ香水を男性が使っており、記憶が呼び覚まされたのでした。

そこから最も苦しい時間が3、4年も続きます。高速道路の車中で突然、逃げ出したくなって飛び降りようとする。「死にたい」「あの時、死んでしまえばよかった」と落ち込みながら夜を明かす。フラッシュバックや自殺衝動、体調不良などに見舞われ、不安定で仕事もできないアンバランスな日々が続きました。

友人たちがずっとそばにいてくれた

そんな早川さんを救ったのは「被害の事を話せる友人たちがそばにいて、一緒に闘ってくれた」ことでした。「あなたは悪くないよ」「一緒にいてくれてうれしいよ」と言い続けてくれた友人たちに「すごく救われました」。そして5年後、警察から被害時の服を返された時が転機になります。「辛かったけど“でも私はこうやって生きている。ここからまた始めよう”と素直に思えました」。友人たちからのメッセージが自分の中にストントと落ちたのでした。そして被害を恥ずかしいとは思わなくなり、PANSAKUを結成、「STAND」を歌いながら被害者を励ますライブや講演を始めました。3年半の活動で、性暴力被害者のほか警察や検察、弁護士、医師らを含め、多くの人たちと接し「受け取ることの方が多かった」そうです。

PANSAKU活動の終了後、時効の日を迎え、携帯電話のデジタル時計が「0時00分」になった時、早川さんは号泣しました。それは敗北感や悲しさからではなく「絶対、犯人より私の方が幸せに生きている、私は人生の中で出会った人たちのお陰でこうして生きている」との確信から出た涙でした。

「自分が語れることを語っていこう」

時効の半月後、早川さんは母親になり「新しい人生の始まり」を迎えました。「今まで人から愛情や優しさを受けることが多かった。でも、自分が親になって与える存在になり、その責任感と喜びを感じました」。そのころから長く苦しめられた症状が自然になくなり、ママ友や職場の人らに被害に遭った話をするなかで「自分自身を伝えていくことで、私の中の被害者支援活動がずっと続いていく」と思うようになったそうです。

そんな折、やまがた被害者支援センターから犯罪被害者支援の「心をつなぐんぼプロジェクト」テーマ曲作り（別項参照）の依頼があり、学生たちと被害者支援についてディスカッションを繰り返しながら『君のとなり』の曲を作り上げました。「若い人たちが被害に遭ってからどうしようじゃなくて、私たち1人ひとりが当たり前のように性暴力被害者の支援について考えていくような世の中にならなければ」と早川さん。「自分が語れることを自分のスタンスで語っていこう」と頷かれました。

最後に、自分を取り戻せたのは「友人やいろんな人がいつもどこかで、何らかの形で私と繋がっていてくれたから」と振り返った早川さんは「被害者の方が孤独にならずに生きていける、そういう支援をしていただければいいなと、当事者の一人として心から願っています」と訴えかけ、締めくくられました。

「心つなぐんぼプロジェクト」とテーマ曲『君のとなり』

「心つなぐんぼプロジェクト」は、犯罪被害者支援の輪を社会全体に広める活動として、やまがた被害者支援センターと東北芸術工科大学、山形県警の三者が連携して取組んだ2015年の事業。山形県の木「さくらんぼ」を大切な人との絆のシンボルとして表し、被害者を社会全体で支える必要性や支援センターの存在などを広く伝える狙いで、プロモーションビデオとテーマソングを学生たちが担当し、元PANSAKU（パンサク）のPAN（パン）さん、早川恵子さんに作曲を依頼した。

プロモーションビデオを上映しました

性暴力被害者である早川さんは、学生たちとスカイプを通して何度も意見交換しながら一緒に考えた。被害者の心情や周りの人による二次被害の深刻さ、そして「自分たちに何ができるだろうか」と学生たち。そうしたやりとりから生まれた言葉を紡いで早川さんが作詞・作曲したのがテーマソング『君のとなり』だった。

♪鮮やかに滲む光の中で　何もできない僕がいた　～　～
何も分からない人たちの　時に残酷な優しさは　君の心が泣いていることに　きっと気づくはずもないんだろう　～　～
泣いている君に精一杯の　僕の気持ちを届けたい　「大丈夫だよ」って　ここから叫ぶよ　何が正解とかなんて　きっと分からないけれど　僕が今できること　僕が今できること
そばにいるよ　君の味方でいるよ

6分弱のビデオでは、早川さんの優しく柔らかい歌声とともに若者たちが次々入れ替わりながら被害者を応援するメッセージを掲げ、人々に訴える。2015年11月から翌年3月末まで、山形県内のテレビなどで繰り返し放映され、大きな反響を呼んだ。

このビデオは、やまがた被害者支援センターのホームページhttp://yvsc.jp/の活動報告「心つなぐんぼ」から視聴できる。